

哲学系三学会合同企画

日本哲学系諸学会連合・日本宗教研究諸学会連合共催

日本学術会議後援

一般公開

高校教員・教職志望者歓迎

〈考える力〉を伸ばす 哲学・倫理・宗教教育とは 未来を見すえた教育の創生

●日本哲学会主催 第74回日本哲学会大会 哲学教育ワークショップ

「シティズンシップ教育と哲学教育」 5月15日に終了しました(来場者数160名)
当日の様子は日本哲学会のHP (<http://philosophy-japan.org>) をご覧ください

●日本宗教学会主催 第74回日本宗教学会学術大会 特別パネル

「〈考える「倫理」〉の授業における宗教学の役割 —市民性教育との関係—」

日時 2015年9月5日(土) 14時～16時(予定)

会場 創価大学 中央教育棟西棟 AW404 (JR・京王線八王子駅下車)

- [挨拶] 岡田真美子(日本学術会議哲学委員会副委員長) [趣旨説明] 氣多雅子(京都大学)
- [提題] 藤原聖子(東京大学)「サンデルが宗教の授業をするとどうなるか —英国宗教科の新展開—」
Jørn Borup(デンマーク・オーフス大学)
「Representing Buddhism and Islam in Danish Religious Education」
土井健司(関西学院大学)「私たちは誰を愛するのか —生命倫理におけるキリスト教的視点—」
- [レスポンス] 小田淑子(関西大学)、林田康順(大正大学)
- [問い合わせ] 宗教研究諸学会連合事務局 jfssr20084@gmail.com

無料参加登録には、事前にご連絡下さい

●日本倫理学会主催 第66回日本倫理学会大会共通課題

「倫理教育の未来に向けて」

日時 2015年10月4日(日) 時間未定

会場 熊本大学 黒髪北キャンパス 全学教育棟 C301教室

- [司会] 木阪貴行(国土舘大学)
- [挨拶] 氣多雅子(日本学術会議哲学委員会哲学・倫理・宗教教育分科会委員長)
- [趣旨説明] 桑原直己(筑波大学)
- [提題] 直江清隆(東北大学)「〈考える「倫理」〉を提案する—「倫理」とは何を教える科目か—」
山田圭一(千葉大学)「高校「倫理」における知識・思考・対話の関係をどう考えるべきか」
井上兼生(埼玉県立大宮高等学校)「高校の現場から考える公民科「倫理」の課題」
- [特定質問者] 苫野一徳(熊本大学)
- [問い合わせ] 日本倫理学会事務局 jse@e-mail.jp (参加無料、事前登録不要)

■ 企画趣旨

本年5月28日に日本学術会議・哲学委員会から、提言「未来を見すえた高校公民科倫理教育の創生—〈考える「倫理」〉の実現に向けて—」が公表された。高校公民科「倫理」の学習目標が主体的・対話的・批判的・創造的思考力の習得であるべきことを謳い、そのための学習方法として哲学対話と原典講読を提案する内容である。

この提言の作成の背景には、日本哲学会、日本倫理学会、日本宗教学会における、大学教員と高校教員のあいだの議論の積み重ねがあり、それらを反映させる形で提言がまとめられた。社会がめまぐるしく変化するなか、これからの教育には、人間としての生き方在り方についての根本的な問いを自分で考える思考力の育成が欠かせない。現行の科目のうち、「倫理」は率先してそのような教育を担える特性をもっている。ところが、「倫理」の履修率は低下しており、専門知識をもって「倫理」を教えられる教員も減少し充実した授業ができていないという現状がある。これに危機感をもった会員等が、〈考える「倫理」〉というコンセプトを広く理解してもらうとともに、多くの方々と幅広い議論の場をもつために、三学会合同の企画を立てた。

2020年度からは大学入試全体が、知識の暗記よりもその運用力と思考力を問うものに変換することが予定されている。そうなれば、高校の授業も変わらざるをえない。さらに、学術会議で分野ごとに作成されている大学教育の「参照基準」も、思考や対話を重視する教育を掲げている。そこには、大学が、専門家のみならず、他者と向き合い社会に参画する「市民」を育成する場として役割を果たすべきことが明記されている。そのような市民性教育（シティズンシップ・エデュケーション）は、高校卒業後すぐに社会に出る生徒にとっても重要であることを鑑みても、「倫理」の授業の可能性と責務は大きく、その実現のために各学会が支援に向かっている。

※提言「未来を見すえた高校公民科倫理教育の創生—〈考える「倫理」〉の実現に向けて—」は学術会議のHPからダウンロード可能です。

■ 日本宗教学会の企画について

「倫理」、あるいは広く哲学教育に、市民性教育の役割を期待する声が国内外に出てきている。自律的思考力を持ち、かつ、他者と協働し、ともにコミュニティの課題にとりくむ市民の育成のために、宗教をテーマとする教育はどのように実践されているだろうか。そこにはどのような利点、また問題点があるのだろうか。この企画では、マイケル・サンデル流のイギリスの宗教の授業、デンマークの公立校でのイスラムや仏教の教え方といった海外の事例、また国内の事例としては、キリスト教宗派教育から思考力重視の生命倫理教育への展開の例などを紹介する。レスポンドントはイスラム学の専門家と、教科書内の法然—親鸞の描き方をはじめとする仏教史の記述について問題を提起している仏教学の専門家である。

■ 日本倫理学会の企画について

日本倫理学会では、2001年から会員の自主企画として初等中等教育における倫理教育に関するワークショップを、途中道德教育との関連をも含めて検討する形でほぼ毎年開催してきており、2008年には学会の公式企画としての「主題別討議」のテーマとしても取り上げた。今回は学会の全体的企画としての「共通課題」において倫理教育の問題に取り組む。提言の趣旨を出発点に、その後共通課題実施時点までの事態の展開、そして今後に向けて、倫理教育のあるべき姿について方向を見定めることを目指す。

提題案の取り纏めにあたり中心的な役割を演じた直江氏は今回の提言全体の基本的方向についての包括的紹介をする。山田氏は提言が謳う「考える〈倫理〉」の具体的方法である「哲学対話」と従来型の「知識伝達」との関係について検討する。井上氏は、現場で働く高校教員の立場から、公民科「倫理」が置かれている具体的な状況と課題とを伝える。